

妖精の魔法

——『妖精の魔法』と聞いて、貴方はなにを思い浮かべるだろうか。

ささやかな願い事を叶える素敵かなな魔法？ 花々はなばなと対話できるような幻想

的な魔法？ それとも、迷子を見つけるような優しい魔法？

いずれも、正解だ。しかしいずれも、正解ではない。

妖精は気まぐれな隣人だ。人間にちょっとしたいを出しては、幸運や不運を無差別に振りまいていく。

運が悪ければ「毎日ハンバーグを食べたい」という可愛らしい願いは、何を食べてもハンバーグの味しか感じなくなる呪いへと変貌する。

同じように、魔法で聞き取れる花々の囁きささやが正気を保てる内容である保

証などどこにもなく、迷子の元凶がそもそも妖精だった、なんてこともある。

すべては妖精の機嫌次第、というわけだ。

もっとも、この世界で『妖精』の存在が学術的に証明されたことは一度もない。ただ、理解の及ばない現象を人々は『妖精の魔法』と呼んでいる。ひとびとそしてもし、その魔法に囚われてしまったなら。……残された道は、ただ一つ。諦めることだ。

無理に解呪を試みて、人間としての形を失いたくなど、ないだろう？

※※※

「はあ？ 『妖精の魔法』……しかも、『愛の紋章』う？」

ギルドの医務室。重苦しい空気が満ちるその部屋に、俺の困惑した声が響く。

沈痛な面持ちで眉を下げ診察机に向かう医者。その対面で、俺は困惑と呆れに眉をひそめていた。そして俺の隣では、一人の魔術師が鉄仮面のような無表情で押し黙っている。

三人の視線は、魔術師——ルシアンの右手の甲に注がれていた。そこには、彼の玲瓏な雰囲気^{れいろう}に不釣り合いな、妙にファンシーな紋章が刻まれている。

長く伸びた髪は後ろで三つ編みにされ、喉元まで律儀にボタンを留めたシャツ。その上に厚手の外套^{がいでう}を羽織った彼は、肌の露出を極限まで拒む隙のない装いをしていた。魔術師にしては程よく筋肉がついていて、まあ男らしさはある。顔の造形はかなり整っていて、どこぞの貴族の家にある像

のようだ。しかし滅多なことでは笑わず、いつも真一文字に唇を横に引いて黙り込んでいる。

俺からすればただの偏屈な男だが、世間の評価は異なるらしい。「陰鬱」ではなく「静謐^{せいひつ}」、「偏屈」ではなく「理知的」。人々は彼を『氷華の魔術師』『美貌の魔術師』と称賛した。王都で天才魔術師と謳^{うた}われた過去もあり、その人気は性別を問わず絶大だった。

そんな高嶺^{たかね}の花が、なぜこんな医務室で、禿^{はげ}げ頭の医者^{あたま}と顔を突き合わせて難しい顔をしているのか。

それを語るには、時計の針を少々^{しょうしょう}巻き戻す必要がある。

ことの始まりは、冒険者ギルドから持ち込まれた、ある調査依頼だった。

——迷いの森、その最深部の調査。

迷いの森は、文字通り立ち入る者の方向感覚を狂わせる深い霧に包まれた高難易度区域である。その最奥に、未知の遺跡が発見されたという。本格的な調査団を派遣する前の先鋒^{せんぽう}として、俺たちに白羽の矢が立ったのだ。

自分で言うのもなんだが、俺の腕はそこそこ立つ。ギルド内でも上から数えた方が早いくらいだ。以前は別の相棒がいたが、なんやかんやあって解散し、しばらくソロでやりくりしていたのだが、これまたなんやかんやあってルシアンと組むことになったのだった。ギルドに無理矢理押し付けられたとも言う。使い勝手のいい“駒”をバラバラに遊ばせておくより、バディを組ませて高難易度帯の任務を与えた方が利益になる、ということだろう。

ルシアンと組んで依頼に挑むのは、これで三度目になる。

彼は気難しく、必要最低限の言葉しか発しない。だが、その魔法の腕はピカイチで、その点は信用していた。

遺跡の調査自体は、はつつがなく終えた。荘厳な石造りの回廊は時の重みを感じさせたが、徘徊する魔獣に脅威となる存在はいなかった。罠付きの宝箱など、俺たちの手に余る情報は詳細に記録し、引き返そうとした、その時だった。

突如として、足元の石床が淡く発光した。ルシアンが埋もれていた何かを踏み抜いたらしい。

幾何学的な魔法陣が網膜を焼き、奔流する光が一点に収束する。その輝きは吸い込まれるようにルシアンの右手に絡みつき——収まって。

気づけば彼の肌には、奇妙な模様が焼き付けられていた。

※※※

「それで、……これからどうするんだ？」

ギルドを後にして、なんとなく歩き始める。俺達の横を子どもたちが、きやらきやらと声を上げながら家へと帰っていく。西の空は燃えるような朱に染まり、俺たちの背後に長い影を落としていた。

依頼は完遂。しかしルシアンは『妖精の魔法』という厄介なものをその身に受けた。

医者 of 診断によれば、即座に命を奪うようなものではないという。

ただ、妖精の魔法は性質が極めて不安定だ。ルシアンの右手に浮かんだ『愛の紋章』も、過去の事例では効果が多岐にわたっていた。

身近な人間に感謝を伝えれば消えることもあれば、愛する者の接吻せつぶんを受けるまで深い眠りに落ちることもある。最悪のケースでは、真実の愛を掴つかむまで性別が反転してしまった例もあるらしい。もはや魔法というより、悪質な呪いの類だろう。

医者いわく「魔術による解呪は例がない」とか。……いや、「解呪」とま
で言われるなら、それはもう呪いだろ。

「どうする、とは」

硬くこわばったルシアンじだの声が耳朶みみを打つ。ただ、その表情はいつもと
変わらず、「硬くこわばった」というのは俺の勘違いかもしれないが。

「いや、明日にならなきゃ具体的な効果も分からないんだろう？」

妖精の魔法は、発現から一夜明けて初めて、紋章が『妖精の求める形』
へと変化する。その形状を読み解くことで、解除の条件を知るのだ。「感

謝」ならその通りに振る舞い、「接吻」なら愛する者を連れてくる。

幸いなことに、ギルドには『妖精の魔法書』という魔道具があった。呪者がその頁を捲めくれば、対応する解法のページが自ずと開かれる仕組みだ。アフターケアはバッチリ、とでも言ってほしいのだろうか。……なんというか、回りくどい呪いである。そんな手間をかけるなら、最初から効果を固定すればいいものを。

だが、医者いわく、特定の術式を組むより、不確定な要素を組み込むほうが魔術的には容易なのだという。つまり、妖精は人間をおちよくり、その反応を楽しんでいる、と。

魔法の存在する世界ではあるが、本物の“妖精”を見た者は誰もいない。だが、伝承や古式ゆかしい魔術の影には、決まって彼らの存在が仄ほのめかされていた。だから人々は、漠然と彼らの実在を信じていた。

問題は、ルシアンがその「悪戯」の標的になったということだ。

明日になれば、何が起こるか分からない。唐突な昏睡こんすいに陥るかもしれないし、もっと深刻なことが起こる可能性だってある。

ならば、せめて今夜くらいは、信賴できる誰かが側にいたほうがいい。そう思ったのだが。

ルシアンは柳眉をわずかに寄せ、視線を石畳へと落とした。

「……そのような者は、いない」

「そ、そうか……」

彼と組んでから、互いの私生活に踏み込むような会話は一度もなかった。そういう空気でもなかったし、彼はパーソナルスペースが広そうで、迂闊うかつに触れなかったのだ。だから今の言葉への感想は、驚きというよりは「やはりな」という得心に近い。

彼とは仕事上の付き合いでしかない。だが行動の端々^{はしはし}、言動の端々から、誰とも深く関わろうとしない気配が常に漂っていた。

肺に溜^たまったため息を一つ。俺は自分の中の良心に折り合いをつけ、覚悟を決める。

「なら……俺で良ければ、明日まで付き添おうか」

「は？」

不本意ながら、これは俺との任務中に起きた不慮の事故だ。彼に非はない。もちろん俺のせいでもない。だが、仮にも相棒が正体不明の呪いを身に受けたというのに、平然と「さようなら」と言えるほど、俺は薄情ではなかった。

何もしないまま明日を迎え、彼の死体と対面する羽目になるのは勘弁だ。もちろん、断られるならそれまでだ。選ぶ権利は彼にある。

——はたして。

「……、……………世話になる」

気の遠くなるような沈黙の後。ルシアンは、搾り出すような声で頷いた。
伏せられた長い睫毛まつげが影を作り、その瞳の奥に潜む感情を読み取ること
はできない。ただ、相当に不本意なのだろうというのは、その声音から感
じ取れた。

二人の影は薄闇に溶け込み、空は深い藍色へと、静かにその色を変え始
めていた。

【Day 1】ハグ♡

「その徴は……『ハグ』だな」

翌朝になって消えていれば楽なものにな、という淡い期待も虚しく、ルシアン^スの右手に刻まれた紋様は変わらなかった。いや、それどころか、昨日は確かに黒だったはずなのに、今や熱を孕^{はら}んだような禍々^{まがまが}しい赤へと色を変えていた。

——抱^{ハグ}きしめ合うこと^グ。

現れた紋様の形を探して『妖精の魔法書』をパラパラと捲^{めく}って——見つ

かったのはそんな一文だ。

隣に座るルシアンを盗み見れば、眉間に皺しわが深く刻まれて凄いことになっている。元より潔癖なきらいのある男だ。かつて気安く肩を組もうとした冒険者をあからさまに避けたどころか、凍えた視線ひとつで心を折った光景が忘れられない。ルシアンに気軽に絡もうとしたその男に悪意などなく、ただ単に誰彼構わずフレンドリーに絡む気質というだけだったのに。

ちなみに、ここはルシアンが逗留とつりゅうしている宿の一室だ。

冒険者は拠点として家を持つ者と、宿を借りているものがある。俺は前者で、ルシアンは後者だ。拠点に宿を選ぶ理由は様々で、単純に定住する気はないからという者や、家事やその他が面倒で、宿ではそれらを代行してもらえるからという者などがある。ルシアンがどういう理由かは分からない。だが、部屋はかなり綺麗きれいに整えてあるので、もしかしたら定住する

気がないのかもしれない。

長い長い沈黙の後、ルシアンは右手を白くなるほど握りしめ、絞り出すように言葉を零した。

「……………私…………と、ハグをしてくれないか」

親の仇でも見るような鋭い眼光。かたき低く苦々しい声。

そんなにイヤなのか、という呆れと、あきイヤなのに頼まなくてはならないのは屈辱なのだろうなあ、という同情が同時に湧き上がる。

—— “ハグ”。

想像していたよりもずっと可愛らしい「いたずら」だ。もつとえげつないものを想像してただけに拍子抜けする。が、彼にとつては辛い試練なのだろう。だからまあ、立派な “いたずら” ではある。

俺でいいならと頷くと、うなずルシアンはわずかに肩の力を抜いた。

※※※

ベッドに膝を突き合わせ、向き合う形で抱き合う。はじめは立って試したものの、一向に紋様が消える気配がなかったのだ。仕方なく、座って密着し続けることになった。

こうして抱き合い始めてから、ルシアンは俺の肩口に顔を埋めて沈黙している。

さらりと零れた長い髪に、この男は髪まで美しいのだなあとバカなことを考える。

この男に出会う前から、王都に天才的な魔術師がいるらしいという噂は聴いていた。歴代トップの成績での魔術学院の卒業、解説不能であった古

文書の読破。華々^{はなばな}しい経歴を持つ彼は、王の覚えもめでたく、いずれは首席魔術師に――なんて気の早いものもあった。

同時に、彼の噂はその容姿についても多く、いわく、百人が百人振り返るような美しい顔だとか。いわく、めったに表情を動かすことがなく、氷華のようなだが、しかしそれがまたいい、とか。いわく、国すら傾かせる天上の美貌、だとか。

王都から少し離れたこの土地の俺達とはといえば、それらの噂を「しよせんは噂」として耳半分で聞いていた。噂は得てして誇張されるもの。美しいと万里を駆ける噂も、実際に本人を見ればたいしたことがない、なんてことも往々^{おうおう}にしてあり得る。

だからまあ、噂通りの人物がギルドに現れた時は「マジか」と思ったものだ。

噂は噂とは思っていたものの、驚いたことにその大部分——魔術の腕も含めて——が“噂通り”で、なんでこんな辺境の冒険者ギルドに、と疑問を持つのは当然だった。

だが、出世争いに敗れたという噂もなく、真相は闇の中。誰にでもフレンドリーな愉快な男がルシアンに真相を聞こうと近づいたのだが——まあ、結果は御存知の通り。水の視線に心を折られて、そのままだ。

人の数だけ過去があるのだから、本人が話したがっていないのであれば、そっとしといてやれと俺は思うが。かくいう俺も、話して楽しい過去ばかりではない。

しかしルシアンはどう見ても近づきたい男だが、その美麗な顔面のおかげか、評判は悪くない。遠巻きにされながらも、崇拝されているというか。聞くに“非公式ファンクラブ”なるものもあるようだし——。

「俺じゃなくなたって、いくらでも相手はいるだろうに……」

俺の漏らした独り言に、ルシアンが肩がぴくりと震えた。誤魔化すのも変だと思い、そのままもう少し心情を伝える。

それを聞いてルシアンは数秒ほど沈黙し、耳元で静かに口を開いた。

「……お前はいちおう私の“相棒”なんだろう。だったら、別にお前でもいいだろう」

「そりゃあ、まあ、手軽だろうけども」

仕事上の相棒を案じて同じ宿に泊まる程度には、自分がお人好しだと自覚している。

また沈黙の時間に戻るかと思いきや、しばらくしてからルシアンは再び口を開いた。

「お前だって、選び放題だろう」

「ん？」

「この間も、受付嬢に粉をかけられていただろう」

「ああ、あの子ね。あの子はいろんな奴に似たようなことを言うからなあ」

「それに、新人にも指導を頼まれていただろう」

「……いや、あれはそういうのではないだろ」

ルシアンが言っているのは最近ギルドに所属したばかりの新人剣士の少年のことだ。面映ゆいことに俺にაცოგაれているとかで、指導を頼まれたことがあった。

あれはモテるとか、そういう部類の話ではないはずだ。

「——どうだかな」

吐き捨てるような声に首を傾げる。元々は、俺以外に抱きしめられたい

相手はいるだろうに、という始まりだったはずなのだが。話がズレている。

まあ、こんな特殊な状況で、さすがのコイツも焦っているのだろう。

案外、可愛いところもあるのだな、と思う。前の相棒はコイツとは真逆に、口から先に生まれたような男だったから、そういう点でも新鮮な気持ちだ。

前の相棒とはそこそ長く一緒にいたのだが、ある時、恋人ができたとかなんとか言っていてあつという間に引退してしまった。今では田舎で恋人とよろしくやっているはずだ。

俺自身は恋愛とは程遠くにいたから、奴の引退宣言は寝耳に水だった。奴が居なくなったのは、ルシアンがギルドに所属してしばらくしたくらいだっただろうか。嵐のような引退に驚いている間に、いつの間にやらルシアンを“相棒”にされていたのだった。

そんなことを考えているうちに思考が現実へ戻ってくる。ちらりとルシ

アンを見た。

さきほどよりもさらに緊張した様子の彼に、さすがに眉をひそめる。俺はコイツを助けたいのであって、我慢させたいわけではない。今からでも表に出て女にでも声をかけてみた方がいいのではないだろうか。少なくともバリバリ戦闘員である俺の硬い身体よりはよっぽど心地いいはずだ。

そう提案してみたのだが。

ルシアンの返答は「うるさい」「お前がいいと、言っているだろう」だった。

怒気を孕むその声に、口を噤む。いや、本人がそれでいいのなら、こちらどうこう言えないのだが……。一瞬、「俺がいい」と聴こえた気がしたが、流石にそれは聞き間違いだろうと思った。

しかし沈黙はすぐに破られた。俺の閉じたはずの口が、また開かれるこ

とになったのだ。

「おいおいおいっ！　なんかすごく熱くなってるじゃないか!？」

ルシアンが体が急速に熱を帯び始めた。ぎよっとして声を上げる。

「……んっ!?　心臓の音も、これ、おかしいぞ!」

早鐘を打つ鼓動が、重なる俺にまで伝わってくる。全力疾走してもここまでならないだろう、というくらい。音にすると「ドドドドドッ」だろうか。内側から肋骨^{あばらばね}を叩き割るような、聞いたこともない激しさだ。

「もしかして、魔法のせいかなぁ!？」

むしろそれ以外考えられない。言うとおりに抱き合っているというのに、なにが問題なのだ。

一度離れようと身をよじると、拒むように背中に回された腕に力がこもった。

「っ、ルシアン！」

「うるさいっ。……黙ってろ」

体は焼けるように熱く、心臓の鼓動もひどく早い。それなのに、ルシアンの声は低く明瞭だった。しかしその芯には熱がこもっていて、場違いにもドキリとした。

「これは……別に魔法のせいではない。………気にしなくてもいい」

「いや、気にするなと言われても……」

明らかに調子の悪そうな相手を放ってはおけない。しかし彼が折れる気配がないため、諦めて力を抜くと、ギチギチと軋きしんでいた拘束がわずかに緩んだ。

しかし変わらず触れた相手の体温は熱く、心臓は爆音を奏でていた。せめて少しでも落ち着くようにと、彼の背中を優しく撫なでる。――する

と。

「ひうつ……!」

「わ、わるい……!」

おおよそ彼から出たとは思えない声だった。反射的に謝り、背中の手を離して手を上げる。触っていない、というポーズだ。すぐに冷罵倒が飛んでくるだろうと身構えた。

だが、返ってきたのは沈黙で。それだけではなく、ルシアンは俺の首筋に額を擦り付け、^{すが}縋るように、より強く抱きしめてきた。

「……なんで、離すんだ」

「え」

「“抱きしめ合う”という、約束だろう……」

「え」

「なあ……」

熱い吐息が首筋をくすぐる、全身の産毛が逆立つ。殊勝な態度にこちらの心臓まで変なりズムを刻み始めた。

おそろおそろ背中に手を戻すと、彼は「……はあ」と、安堵あんどしたような吐息を漏らしてした。

その後はただ静かな沈黙だけがあった。部屋にはふたりの息の音が響く。その静けさが気まずい。抱き合う身体が熱い。心臓も変わらず酷く動いている。彼の異常は確かなのに、こちらが正常なのがなんだか場違いのように思えてくる。

どれほどの時間が経っただろうか。

じりじりと、ルシアンが腰を引き始めた。上半身を俺に押し付けたまま、下半身だけを遠ざけようとしている。

「……ルシアン？」

不審に思い顔を覗き込もうとすると、頭をぐいと押さえつけられた。

「どうし……っ、おい、紋様の色が変わってるぞ」

禍々しい赤から、昨日と同じ黒へ。抱きしめ合うことという妖精の要求が果たされた、ということだろうか。

ルシアンもそれに気づいたのか、俺の頭を押さええていた力がふっと抜けた。

自然、俺は頭を上げてルシアンを見た。

「よかつ……………」

そして、目の前の光景に言葉を失った。

真っ赤に上気した頬、潤んだ瞳。いつも鋭く尖っている表情は、陰が取れて緩み——誤解を恐れずに言うのであれば——、発情したような顔をし

ていた。

頬は上気し、目を潤ませて、無防備な色気を撒き散らしている。

見てはいけないものを見た気がして、視線を落とした瞬間——それに気づいてしまった。

ルシアンズのズボンの股間が、形をはっきりと見えるほどに、大きく膨らんでいることに。

「バッ……！　っ！　……~~~~っ！」

ルシアンは「俺が気づいたこと」に気づいたのだろう。彼は耳まで真っ赤に染め上げて、脱兎のごとくベッドから飛び降りた。そしてそのまま、何度もつまづきながらトイレへと駆け込んだ。

嵐のようなそれを見送って、「あ……」と意味のない声をこぼした。

つまり、唐突に腰を引いたのは、そういうこと。

妖精の魔法は、感度を異常に引き上げる類のものだったのだろう。

仮にも相棒の、しかも俺に反応してしまったなんて、ルシアンにとって災難だっただろう。戻ってきたら、努めて自然に接してやらなければ。

そんなことを考えながら、脳裏にちらつくものがある。あの鉄面皮な男の、熱に浮かれた表情。

不覚にも「可愛い」と思ってしまったことは、絶対に知られてはならない。

ともあれ、災難はこれで終わった。日常に戻るだけだ。

その時は、そう樂觀していた。

——まさか、五日も手を変え品を変え、妖精の紋様要
求が続くだなんて、夢にも思わなかったのだ。

【Day 2】キス♡

「……………残念だが、今日は別の徴しるしみたいだな」

「一日で消えるんじゃないかったのか……………」

「まあ、うん。……………うん」

妖精の紋章が示す通り、ハグを交わした翌日。俺は再びルシアンルシアンの部屋を訪れていた。

てっきり一度で終わりだと思っていたのだが、朝になっても紋章は消えず、あまつさえまた毒々どくどくしい赤色を放ち始めたのだ。朝食中に届いたルシアンからの通信魔術に、俺は慌ててパンを口に詰め込み、彼の元へと駆けつけた。

そうして、右手の紋様を確認すべく『妖精の魔法書』をめくり始めてしばらく。

——接^{キス}吻。

それが、今日の妖精が要求らしい。

事前に自分で魔法書をめくっただろうルシアンも、再びそのページを見て、顔を覆って盛大にため息を吐いた。俺はといえば、彼に掛けるべき慰めの言葉も見当たらず、ただ複雑な心境で彼を見守るしかなかった。

※※※

「……ほんとうに、いいんだな？」

「うるさい、やれ」

昨日と同じように、俺とルシアンはベッドの上で向き合って座っている。今回も相手は俺でいいという。乗りかかった舟だしな、と了承したが、いざとなると多少思うことはある。

何度も「本当に俺でいいのか」と確認する俺に、ルシアンは眉間の皺しわをより一層深くして「早くしろ」と急かした。凄んでいても、その端整な顔立ちは揺るがない。だが美人な分、圧があった。

コイツは他人に触れられるのが苦手なはずだな、とか。でも、昨日はあんなに抱き合ったしな、とか。逡巡しゆんじゆんは尽きなかったが、本人が望んでいる以上、俺は腹を括った。

ゆっくりと顔を近づけ、彼の唇に、自分のそれをそつと重ねる。

「っ」

触れるだけの、ほんの軽いキスだ。それなのに、ルシアンは生娘のようにビクリと震え、長い睫毛を揺らした。

思わず、その先を暴いてやりたいという衝動が首をもたげる。だが俺は名残惜しさを引きずりながらも、ゆっくりと顔を離した。怯えたような、そのくせ何かを期待しているような、潤んだ瞳でルシアンはじっとこちらを見つめていた。その視線を断ち切るように、俺は口を開く。

「……紋章は？」

「っ、……消えていない」

ルシアンの右手の紋章は、依然として赤いままだった。

それから数度、同じように唇を重ねた。しかし紋章の色に変化はない。

昨日のように時間をかければ色が変わる可能性はある。だが、なんとなく、それでは足りない気がした。

先に動いたのは、意外にもルシアンの方だった。

ちろり、と赤く小さな舌先が、俺の唇をなぞるように舐めた。反射的に口を少し開くと、情緒もへったくれもなく、ぐい、と彼の舌が口内へと侵入してくる。

恐る恐る、舌が迷子のように蠢く。あまりにも拙い動きだった。

それに、遠慮というものが吹き飛んだ。彼からそうするのなら、もう、いいだろう。

正しい方法を教えるように、今度はこちらから舌を動かした。

「っ、……っっ！」

相手の舌を絡め取り、押し戻す。驚いたように硬直しているのをいいこ

とに、口腔こうくうの柔らかな粘膜を舌尖でなぞった。一番敏感な場所を探り当てて、そこをしつこく撫なで上げる。彼の身体が跳ねた。

「んっ、ちゅっ……は、あっ♡」

ルシアンは面白いくらい、俺に翻弄された。あっぷあっぷの顔で涙目になる彼の項を、シャツの襟越しに撫でながら囁ささやく。

「——こういう時は、目を閉じるんだ」

「っ……♡」

耳まで真っ赤に染めて、ルシアンはぎゅう、と瞼まぶたを閉じた。その素直さに吐息だけで笑って、また唇を合わせる。

「ちゅっ、……んっ♡　っ、あっ♡　はあっ、っ♡　っ♡」

下手くそながらも、俺を受け入れようと必死に舌を絡めてくる。ぴくぴくと震える彼の姿は、いつもの威厳みげんなど微塵も感じさせなかった。鉄面皮

は剥がれ落ち、眉をハの字に歪めて、いっばいいいっばいといった様子だった。

息継ぎが下手くそな彼のために、合間に少し隙間を作ってやれば、彼は必死に息をする。そして、俺がまた口を塞げば、今度は蕩けたような息を漏らした。

……だから、少しやりすぎたかもしれない。

しばらくして完全に唇を離すと、ルシアンは顔を林檎のように赤くして、荒い呼吸を繰り返していた。飲み込みきれなかった唾液が口元から一筋、糸を引いて垂れている。それを指先で拭ってやっても、彼は大人しくしていた。

ようやく呼吸が整い始めた頃、彼は恨みがましい視線を俺に向けてきた。

「……ずいぶんと、慣れてるんだな」

お前と比べたらな、という言葉は喉の奥に飲み込んだ。彼は機会がなかったというより、あまりの人嫌いが過ぎて、誰ともこうしたものをしてこなかったのだろう。

ちらりと彼の右手を見るが、紋章は依然として赤いままだった。ルシアンも俺の視線を追って自らの手元を見つめ、顔を歪める。

「足りない、みたいだな」

「……」

彼は一度唇を強く噛かんだ後、羞恥しゆうちに耐えるように絞り出した。「……もっと、キス、してくれ」その耳は赤い。消え入りそうな声で彼は願う。

それに、俺は行動で応えた。

彼の上唇を優しく食み、下唇を吸い上げ、開いた隙間から再び舌を滑り込ませた。

「んっ、っ、ちゅっ♡ は、あっ♡」

あっぷあっぷして俺の動きに翻弄されているルシアンは、本音を言うところかなり可愛らしかった。

普段の釣り上がった眉は情けなく垂れ下がり、教えた通りに律儀に瞳を閉じている。目尻は熱に浮かされたように赤く染まり、いい場所を攻めてやれば、身体をビクンと跳ねさせて、湿った甘い息を漏らした。

しばらくその反応を堪能した後、名残惜しくも唇を離す。だが、右手の紋章はまだ赤いまま。

酸欠で思考が回っていないのか、ルシアンはぼんやりと目を開け、もう一度、とねだるように無言で口を小さく開けた。その無防備な仕草に、俺はつい意地悪く笑いながら、触れるだけの短いキスを返す。

もっと深いものを欲しがって唇が戦慄くのを知りながら、俺は彼の額に

そっと口づけた。

「っあ♡」

そのまま、顔中の至る所に唇を落としていく。

こめかみ、まぶた、目尻、そして鼻筋……。

唇が彼の肌に触れるたび、ルシアンは小さく震え、甘い吐息をこぼした。最後に顎へとキスをした頃には、彼はくたたりとしていた。いつもの清廉な空気は霧散し、そこにはただ、情欲に溺れかけた一人の青年がいる。

首筋にもしたかったが、そこは詰め襟に守られていた。禁欲的にさえ見えるのに、今の彼はその対極にいる顔をしていた。

小さく喉を鳴らす。耳元へ顔を寄せ、みみたぶ耳朶にキスをする、彼はまた

「あっ♡」とちいさく喘あえいだ。耳元に唇を寄せて、囁く。

「ルシアン……、ずいぶんとろけた顔をしているな」

「あ、っ♡ そ、んな、こと……っ♡」

「耳元で話されるの、好きなのか？」

「んんっ♡ そういうわけじゃ……、あっ♡」

「そんな蕩けた顔で言われても、説得力がないけどな……」

目尻を赤く染め、うるうると瞳を潤ませておいて。「そんなことはない」
なんて嘘^{うそ}だろう。

鉄面皮が崩れ去ったルシアンの珍しい様子に、いけないと思いつつも悪戯心が湧き上がった。

耳の輪郭をなぞるように舌を這^はわせ、わざと濡^ぬれた音を立てて舐め上げる。

「あっ、あっ♡ んああっ♡」

ルシアンはたまらないといった様子で喘いだ。だが、自分の漏らした声

に驚いたのか、すぐに手のひらで口を覆う。それでも、指の隙間からは抑えきれない嬌声きようせいがこぼれ落ちた。

「っ、あっ♡ ……っ、っ♡」

舌先で耳をくすぐるたび、彼の身体はびくびくと面白いほど跳ねた。

必死に押し殺そうとする声を聴いてやりたくなつて、俺は自らの口を塞ぐ彼の手を掴つかみ取った。はじめは弱々よわよわしく抵抗していたが、耳を攻め立てると、やがて指先から力が抜けていく。

「ひい……んっ♡ あっ、あっ♡」

ぐしゅぐしゅと、わざとらしく卑猥ひわいな水音を立ててやれば、彼は身を振よじって悶もだえた。仕上げに、耳たぶを優しく甘噛あまがみしてやれば、彼は全身をびくびくと震わせて仰け反る。

「ダ……メ♡、ああっ…ダメえ♡」

「なにがダメなんだ……？」

「みみ……♡ あ、やめ……て……え♡」

「耳、キライか？」

「う、あ♡♡ つ、あ♡、だあめ……♡♡」

拒絶の言葉とは裏腹に、ルシアンは俺を突き放そうとはしなかった。ただ俺の腕に身を預けて感じている。だが、俺も無理強いをしたいわけではない。

「本当にイヤか？」

動きを止めて問いかける。ルシアンは目をグルグルさせて、ひんひんと小さく鼻を鳴らしながら答えた。

「ンっ♡ わあかつん、ないあ……♡♡」

快楽が強すぎるのだろう。妖精の魔法のせいかな、あるいは彼本来の素質

なのかは分からないが。

しかしこれでは合意を取れたことにはならない。

俺は一度動きを止めた。それでもう一度訊^きく。

ルシアンはぼんやりとしたまま、しかし瞳の奥に熱を宿して、眉を下げている。

もつとしてほしい、と瞳が雄弁に語っていたが、俺はあえて動かずにいた。するとルシアンは、気まずそうに視線を彷徨^{さまよ}わせた後、震える声で小さく囁いた。

「……もつと」

「うん？」

「もつと、してほしい」

「なにをだ？」

「っ、……耳をつ、なめたり……」

「……それから？」

「きっ、キスを……したりっ♡」

「——わかった」

その時の自分が、どんな目で彼を見ていたのかは分からない。ただ、彼は俺の目を見つめ、喉を大きく上下させて唾を飲み込んだ。

「っ、んっ♡ ♪♡ ……あ♡、……ふっ、んあ……あっ♡♡」

ルシアンは持ち前の頭の良さを発揮して、次第に俺の呼吸に合わせるコツを掴み始めた。いまだこちらについていこうと懸命だが、いっぱいはいという感じではなくなっている。俺に口の中をくすぐられるが堪らないとでもいうように息をし、舌を合わせればいじらしく震えて感じる。

息が苦しくなってきたところで、ゆっくりと唇を離す。すると無意識な

のか、まだ繋つながっていたといわんばかりに彼の舌が追いかけてきた。そのまま、ルシアンは舌を仕舞い忘れた、間抜けな仔犬こいぬのようになる。そのかわいらしさに頬へ軽くキスを贈り、再び耳元へ唇を寄せる。

「ああ……♡ ♡ ……アツ♡♡」

やはり耳が弱いらしい。囁くだけで大げさに身を震わせ、舐めてやれば恍惚こうこつとした表情で頬を染める。

「うああ♡ ♡ ……あ♡♡、♡ ♡ ♡ ひいん、あ♡……♡、ああ♡アツ♡♡」

ルシアンは喘ぎながら、魚のようにぱくぱくと口を開閉させた。伸ばされた舌が、空気に触れるだけでもどかしげに震えている。

どうやら彼は、耳と同じくらい、キスが好きなようだった。

空気を食むだけの彼を可哀想に思っ、唇の代わりに俺の指を貸してや

ることにした。

彼の開いた口に指を滑り込ませ、上顎のザラつきを執拗しつように擦ってやると、ルシアンは腰を跳ねさせるように浮かせた。

「こら、動かない」

「ンッ　ン……ッ♡！」

叱ってやると、いじらしく従って震えるばかりになる。褒めるように頭を撫でてやれば、嬉うれしそうに手のひらへすり寄ってきた。冷徹無比な天才魔術師の面影は、もはやどこにも残っていないかった。

指の本数を増やし、口腔内を隅々すみずみまで愛撫あいぶする。恐る恐る伸びてきた彼の舌を捕まえ、捌からめ取って遊んでやる。同時に耳朵も攻めてやれば、ルシアンは顔を真っ赤にして痙攣けいれんした。

ピンと伸ばされた彼の舌をぐしゅぐしゅと指で擦り上げ、耳穴を舌で掘

ってやる。彼は目を見開いたまま、ぎゅうと全身を硬直させた。

「ひ、ん、~~~~~……♡ ツツツ♡」

そうして、一際大きく跳ねたのを最後に、彼はくたりと力を抜いた。

髪は乱れ、口周りは唾液で汚れ、呆然としたまま虚空を見上げている。

そんな彼の様子に、俺の理性もようやく戻り始めた。

……もしや、かなりマズいことになったのではないか。合意はあったとはいえ、興に乗りすぎた自覚はある。

内心で焦る俺をよそに、ルシアンは放心したまましばらく動かなかった。その間に、俺は自らの袖で彼の口元の濡れを拭いてやる。彼はそれにも反応せず、ただ宙を見つめていた。

しばらくして、ルシアンはのっそりと上体を起こした。

無表情のまま、彼は俺をじっと見つめる。冬の空のように澄み渡った青

瞳が俺の姿を映し出す。その瞳の奥に、言葉では言い表せない感情が沈んでいるように見えて、俺は目が離せなくなった。

引き寄せられるように、ルシアンは俺に唇を重ねた。

「んっ」

舌を入れることもない、ただの静かな接吻。先ほどまでのそれとは異なり、ただ熱い唇がぴたりと重なるだけの、穏やかなものだ。

呆然とする俺。そして、俺を見つめながら唇を合わせ続けるルシアン。その時の彼は、どういうことか、ひどくしあわせそうだった。

そうして、ひとつぶ。真珠のような涙が彼の頬を伝い落ちた。

どれくらい時間が流れただろうか。ルシアンの薄く柔らかな微笑みが、徐々に強張り始め、顔がじわじわと赤色に染まっていく。ガクガクと油の切れたからくりのように顔を離し、彼は慌てて目を伏せた。俺も自然と視

線を落とすと——ルシアン、明らかに不自然に濡れたズボンが目に入っ
た。しかもそこには、今も服の下から強く形を主張しているものがある。

そして、俺がその事実を認識したことを、ルシアンも悟ったのだろう。

「~~~~~ッ！」

「いてっ」

声にならない悲鳴を上げ、彼は俺の右肩を力任せに殴りつけた。魔術師
の筋力ゆえ大した痛みではないが、あまりの反射的な動作に俺も声を上げ
てしまう。すると今度は、先ほどよりも鋭い一撃が左肩に飛んできた。

ルシアンが跳ねるように立ち上がる。激昂げっこうされるか、最悪の場合は攻撃

魔術をぶっ放されるかと身構えたが、彼は「う、あ……」と呻うめきき声を漏こら

しながら、よろよろと逃げるようにトイレへ消えていった。理不尽なこと
には必ず口を出す性格の彼が何も言わなかったということは、いままでの

行為自体はルシアン的には「合意の上」と判断されたのだろう。

すれ違いざまに確認した彼の手の紋章は黒色へと戻っていた。

……まあ、少々暴走^{しょうしょう}してしまった気はするが、結果オーライということにしておこう。

——……結果オーライということに、したい。

【Day 3】乳首責め♡

——三日目。

ルシアンの右手に刻まれた紋章は、非常に残念なことに消える兆しをまるで見せない。俺は今日も今日とて、相棒としての義務を果たすべく、彼の宿の部屋を訪れていた。

昨日、あんなことをしたのだ。顔を合わせた途端、最悪拒絶される可能性があるたんたんと覚悟していた。だが、意外なことにルシアンは淡々と俺を迎え入れた。

そうして、今日示された課題だが……。

——乳首責め胸先への愛撫。

……。……もはや『妖精の魔法』などという可愛らしい呼び名は返上して、『性愛の呪印』とでも改名すべきではないだろうか。

ハグは親愛の情で通る。キスも、まあ、百歩譲って許容範囲だ。だが今回のこれはどうだ。妖精という種族は、悪趣味な好色家なのか？ どう考えても『いたずら』という範疇はんちゆうを逸脱していると思うのだが。

しかし、内心で毒づく俺とは対照的に、ルシアンはきょとんと首を傾げていた。不思議で仕方がない……というような。そして俺の予想通りのセリフを彼は言った。

「——乳首なんて触って、一体どうなるんだ。面白いものでもないだろう」
薄々うすうす思っていたが、こいつの性知識は子供のそれと同レベルなのは。

これほどの輝かしい顔面を持ちながら、女一人、男一人、抱いたことも抱かれたこともないのだろうか。……なさそうだな。

いやしかし、誘いは山ほどあったはずだ。だがこの男のことだから、すべて切り捨ててきたのだろう。容易にその姿が思い浮かぶ。きっと童貞処女なんだろう。……だからなんだという話ではあるが。

そんな下世話な下事情を考えている俺の前で、その潔癖な男がもじもじと視線を彷徨さまよわせている。

「その……、今日も、頼む」

「乳首なんて……」と言っておきながら、なぜかその頬は微かに熱を帯び、睫毛まつげが不安げに震えていた。そしてそれを「かわいい」なんて思ってしまった自分の頭を叩たたきたい。

こいつは相棒だ。これは単なる緊急避難的な、呪いを解くのを手伝って

いるだけ！ それだけだ……！

いかがわしい感情を消し去るように、俺は重々しく頷いた。
おもおも うなず

そうしてルシアンを抱えるようにして、ベッドの縁に座らせる。

——昨日は少し場に流されたが、今日はそんなことはしないぞ！

※※※

——などという殊勝な決意は、数分後には無惨にも砕け散っていた。

「ふっ、あ……ッ♡ は……、な、んだ……これっ♡ ちくび、が……っ、

へん……っ♡」

俺の腕の中で、ルシアンが真っ赤な顔をして悶えている。もた彼の胸元、シ

ヤツの上から指を当てて、少しばかり刺激を与えているだけだというのに。

………。……言い訳させてほしい。

はじめは、本当にこんなふうにするつもりはなかった。ルシアンが肌を晒すのを頑なに拒んだため、薄い布越しに、指先で軽く押していただけなのだ。

しかし、紋章の色は赤のまま。

仕方なく、指の腹で小さな円を描いたり、乳輪の輪郭をなぞるようにしたり、カリカリと爪の先で引っ搔^かいてみた。すると、柔らかな肉の中で眠っていた突起が、みるみるうちに硬度を増し、生地を押し上げてきたのだ。

こうなればもう、触れるべき場所は明確だ。俺は無心になろうと努めながら、指先でその小さな突起をいじくり回した。

くすぐって、引っ搔いて、ほじって、叩く。

「あっ、……んっ……、ひ……あ、あっっ♡」

そして気づいたら、腕の中でルシアンが真つ赤な顔で喘いでいた。――
と、そういうわけだ。

あまりの反応の良さに、思わず指を止める。

「あつ、カガリ……？」

だが、潤んだ瞳で見上げられ、縋るように名前を呼ばれては、ぎこちなく動き出すしかなかった。

普段はクールな美人が、俺の指先一つで羞恥に頬を染め、乱されている。その背徳的な光景に興奮を覚えない者だけが、俺を責めてほしい。

ルシアンルシアンの体温が伝播し、俺の脳もドロドロとふやけはじめる。当初の決意も脆く揺らいで、もはやほとんど影も形もなかった。

「ひっ♡♡♡ア、カガリ、なんつか……、あ♡♡♡へん♡♡♡アあ♡♡♡」

「変？ なにが？」

問いかける俺の声は、ドロリとした熱を孕^{はら}んでいた。しかしルシアンはそれに気づく余裕もなく、ただ己の体に起きている未知に混乱しているようだった。

「わからなっ……あ♡、ひいっ♡」

「いいから、ゆっくり説明してみろ。どこが、どうなってる？」

「んっ♡ んっ、っ♡ ……ちくび、さ……わ、られるとっ……♡、アッ

♡ ……か……らだ……がむずむずして、あ……っ♡、へん、っ♡」

「それは変じゃなくて、『きもちいい』って言うんだ。……そうだろう？」

「き……もち？ わ……かんなっ……ああっっ♡、ひいん♡ ……きも……ち

い……い、かもお……？ アッ♡」

未知の感覚に『きもちいい』という名前を与えられた途端、彼の反応はさらに加速した。ルシアンの瞳はさらにとろりと蕩^{とろ}け、羞恥に震える唇か

らは甘い喘ぎが漏れ出す。

せっかくだから、と、感じやすい耳元に唇を寄せて、気に入りの触り方を訊^きいてみる。

「どう触られるのが、一番イイ？ 教えてよ」

「ひっ♡、……っあ……ッ♡」

「こうやって、周りをくるくるされるのと……」

「ああっ♡、……あ……ん……ん♡ ん~~~~っ♡」

「それとも、硬くなった先端を、爪でスリスリされると……」

「ひ……っ♡ ……あ……あ、あっ♡」

「それとも、こうして真上から、トントン叩かれるのと……」

「あっ♡ っああっ♡ あっ、……あっ♡ ツ♡ ツ♡ ツ♡」

「……それとも、奥まで押し込まれるのが好きか？」

「ん~~~~♡、……っ、あっ、あっ、あッッ♡」

どんな問いかけにも、彼は力なく首を振り、真っ赤な顔をして悶えた。少しでも快楽を逃そうとしたのか、シーツを掴んだ指先が白く強張っている。足がシーツを蹴るが、俺が背後から抱きとめているせいで、結果として彼は自分から俺に体を擦り付ける形になっていた。

昨日も思ったが、感度が良すぎる。最初こそ、わけがわからないと眉を寄せていただけだったのに、少しすれば指の動きに合わせて無意識に腰を揺らしはじめ、今ではこうしてトロトロになっている。

妖精の魔法のせいだと思いたいが、そうでない場合、よくまあまっさらなままこの歳までいられたなど逆に感心する。

「どうだ、どれが一番良かった？」

「わ……かなっ、どれも……っ♡、つきもち、いつ、ッ……♡ あ、あ

♡♡ ……♡♡ ……あ♡」

実際、どれを試しても気持ちよさそうだった。ただ、一番反応が良かったのは、指をぐいと押し込んだ時。ビクンと跳ね上がるような震えて、声も一段と甘くなっていた。

……だが、素直に望むものを与えてやる気はない。

あえて一番敏感な頂点には触れず、乳輪の周囲を指先でじつとりと撫で回す。シャツ越しでもはつきりと分かるほど、ルシアンとがの乳首は尖り、待ちわびるように服を押し上げていた。むしろ服を着ていたほうが逆に卑猥ひわいに思えるほど。

ルシアンはもどかしそうに膝を擦り合わせ、喉を鳴らす。飲み込みきれなかった唾液が口端を垂れ、そこには、玲瓏れいろうの魔術師“なんてどこにもいなかった。

「もっと、あ……つよく……さわって♡ ほ、……っしい……っ♡」

「こんな感じか？」

服の上から、硬い突起をぎゅうと、強めに指先でつねる。

「ああ、……ああっ……もっとおッ♡」

ルシアンはヒイヒイと泣きながら、それ以上を願った。

「……なら、服を脱げ。直接、触ってやる」

「っ、……っ♡ わか、った……」

ルシアンの指が、シャツのボタンにかかる。だが、指先の震えが止まらず、ボタンを上手く捉えられない。カチカチと、虚しく爪が当たる音だけが部屋に響く。

「手伝おうか？」

「……っ、いや！　じ、じぶんで……っ」

純粋な親切心だった。だが、ルシアンは大げさに嫌がって、「ふう♡ふう♡」と荒い息を吐きながら、ようやくシャツの前を寛げた。

だが、完全に脱ぎ捨てることはせず、首や腹のボタンはそのままだ。つまり必要な部分だけ——胸の前だけボタンが外されている。

かなり間拔けな姿だ。せめて——。

「首まで外せよ」

「これは……このままで、いい……」

「ふうん？」

半端に露出した白い肌が、逆に淫靡いんぴさを引き立てている。俺は無言で、剥き出しになった赤く熟れた果実を、指先でピンと弾いた。

「アッ♡ アっ、んあああッ♡」

ルシアンは高く甘い声を上げ、仰け反った。その反動で足が跳ね、ベッ

ド脇に置いてあった椅子を派手に蹴り飛ばした。

かなり大きな音が響く。だが彼は自分の立てた音にすら気づかないほど、感じきっているようだった。

しつとりと汗ばんだ肌は、指を這^はわせるだけで吸い付くような熱を持っている。指先で軽く撫でるだけで、ルシアンは小さく喘いで身を振^{よじ}った。

すりすりと胸の外側——乳輪よりもさらに外を擦る。ピンと立ち、ふるふると震えるそこには、まだ触れない。ゆっくりと時間をかけて、中心との距離を縮めていく。

「か、カガリ……」

上目遣いの、媚^こびと焦燥に満ちた声を無視する。二本の指で乳輪を軽くタップしてやれば、ルシアンは小さく喘いだ。

程よいところで、手を止める。身じろぎをして、ルシアンは辛坊たまら

ないと口を開く。しかし彼の喉から音が出る前に——触れられたくてたまらないというように熟れて立ち上がったそこを、——押し込んだ。

「アアアアアアッッッ♡♡♡」

ルシアンが全身が大きくのけぞり、開いた口から唾液が糸を引いてシューへ零れる。ルシアンが大きく息を吸って脱力する寸前で、押し込んだ指を戻して、今度は乳首を弾いてやった。

「アッ、ダメえっ♡ いまアッ、アッ♡ まだ……っ、ヤメッ♡」

ぴん♡、ぴん♡、ぴん♡、ぴん♡、と片方ずつ、順番に弾く。

「あ……ッ、あ……ッ、あ……ッ、っああ……ッ♡！」

ルシアンは楽器のように、その喉を震わせた。眉を寄せ、苦悶くもんに満ちた表情をしながらも、その瞳は恍惚こうこつに潤んでいた。

——トントン。

不意に、無機質な音がドアを叩いた。

——あのお、お客さまぁ。大きな音が聞こえましたけど……なにかありましたか？

部屋の外から、宿の従業員らしき若い男の声が聞こえてくる。「お客さま」の発音が拙くて、きつと言い慣れていないのだろう。小さな宿特有の馴れ馴れしさがあつた。

俺とルシアン動きが凍りついた。

「大きな音？」

俺は努めて平然とした声を出し、当たり前の顔をして、指先はルシアン
の乳首をいじり始めた。「ヤメッ……、アッ♡」「声を出すなよ。聴かせた
いのか？」「……ッ♡ アアッ♡」俺の意地の悪い囁きに、ルシアンは悲痛
な顔をして、震える手で自分の口を固く塞いだ。それにニンマリと笑って、

ますます指の動きを激しくする。

「どんな音だ？」

「……ッ……っ♡ ……ッ♡」

——なにかあ、大きな物が倒れたような……。

「ああ、さっきルシアンが躓つまずいて、椅子を蹴ふってしまったんだ。その音じゃないかな」

「……、……♡ ……ッ♡ ……うゝ♡」

指先を動かすたび、ルシアンは身体を震わせ、漏れ出そうとする声を必死に手で押し殺している。

——そうですね。ああ、あと、何だか争うような声も聞こえた感じがしたんですけど……。

「争う？ まさか。俺たちはそんなことしてない。……なあ、ルシアン？」

「……う♡ ……♡ ……♡ ツ♡♡」

「――返事をしてやれよ、ルシアン」

強く名前を呼ぶと、ルシアンは信じられないものを見るような目で俺を見上げた。口を塞いだまま、必死に首を横に振る。だが、俺は無言で彼を見つめ返した。

観念したのか、彼は震える手を口から離して、ごくりとつばを飲み込んだ。

ぶるぶると唇を震わせて、そのくせ、目の奥には妖しい熱を宿していた。
白哲の美貌が朱に染まり、目はとろりと潤んでいる。その顔は、あまりに
も淫らだった。この顔のまま表に出れば、狂うものも出るかもしれない。
そんなふうに思わせる顔。そしてそれはきっと、扉の向こうの男も例外で
はないだろう。

続きは本編で！